

阿蘇山の火山活動解説資料（令和8年6月）

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

阿蘇山では、21日09時頃から火山性微動の振幅が増大し、やや大きな状態となりました。また、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が同日実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が1日あたり1,700トンと増加し、やや多い状態でした。

火山活動が高まった状態となっており、中岳第一火口から概ね1kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生するおそれがあることから、同日16時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（活火山であることに留意）から2（火口周辺規制）に引き上げました。

GNSS連続観測では、2026年5月頃から草千里を挟む基線及び広域の基線において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

中岳第一火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスに注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1、図2-1、図4-②～④、図5）

火山性微動の振幅は小さな状態で推移していましたが、21日09時頃から振幅が増大し、やや大きな状態となりました。22日01時50分頃には中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅が $3.0\mu\text{m/s}$ 程度と一時的に大きな状態となりましたが、その後は概ね $1.0\mu\text{m/s}$ を下回る程度の小さな状態で経過しました。

火山性地震の月回数は2,366回（5月：2,536回）と、やや多い状態でした。孤立型微動は3,266回と前月（5月：1,919回）と比べて増加し、やや多い状態でした。2025年1月中旬頃から火山性地震と孤立型微動が増加した状態が続いています。

震源が求まった火山性地震は、中岳火口付近のごく浅いところから深さ0km付近に分布しました。

・火山ガスの状況（図4-⑤）

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、火山性微動の振幅増大前に1日あたり500～900トン（5月：600トン）と少ない状態で経過していましたが、21日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した現地調査では、1日あたり1,700トンと増加し、やや多い状態でした。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和8年7月分）は令和8年8月10日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び阿蘇火山博物館のデータも利用して作成しています。

資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・噴煙など表面現象の状況（図2、図3、図4-①⑥⑧）

中岳第一火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上900m（5月：1,000m）まで上がりました。監視カメラによる観測で、22日01時50分頃の火山性微動の振幅増大後に、噴出物が火口内にとどまる程度の土砂噴出を確認しました。この土砂噴出に伴い、白色の噴煙が火口縁上600mまで上がりました。また、22日以降の夜間に時々、阿蘇火山博物館の提供による火口カメラAの映像で南側火口壁の赤熱を確認しました。監視カメラにより南側火口壁で赤熱を観測したのは、2024年7月12日以来です。

11日に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約7割と前月（5月：約6割）と比べて増加していました。噴湯や土砂噴出は認められませんでした。赤外熱映像装置による観測では、湯だまり面の最高温度は74℃と前月（5月：69～76℃）と同程度でした。南側火口壁の最高温度は403℃と前月（5月：345～371℃）と比べて高くなっており、高温の領域は拡大していました。また、30日に実施した現地調査では、噴湯や土砂噴出は認められず、火山性微動の振幅増大前の観測（11日）に比べて湯だまりの色や量に特段の変化は認められませんでした。

・地殻変動の状況（図6、図7）

GNSS連続観測では、2026年5月頃から草千里を挟む基線及び広域の基線において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

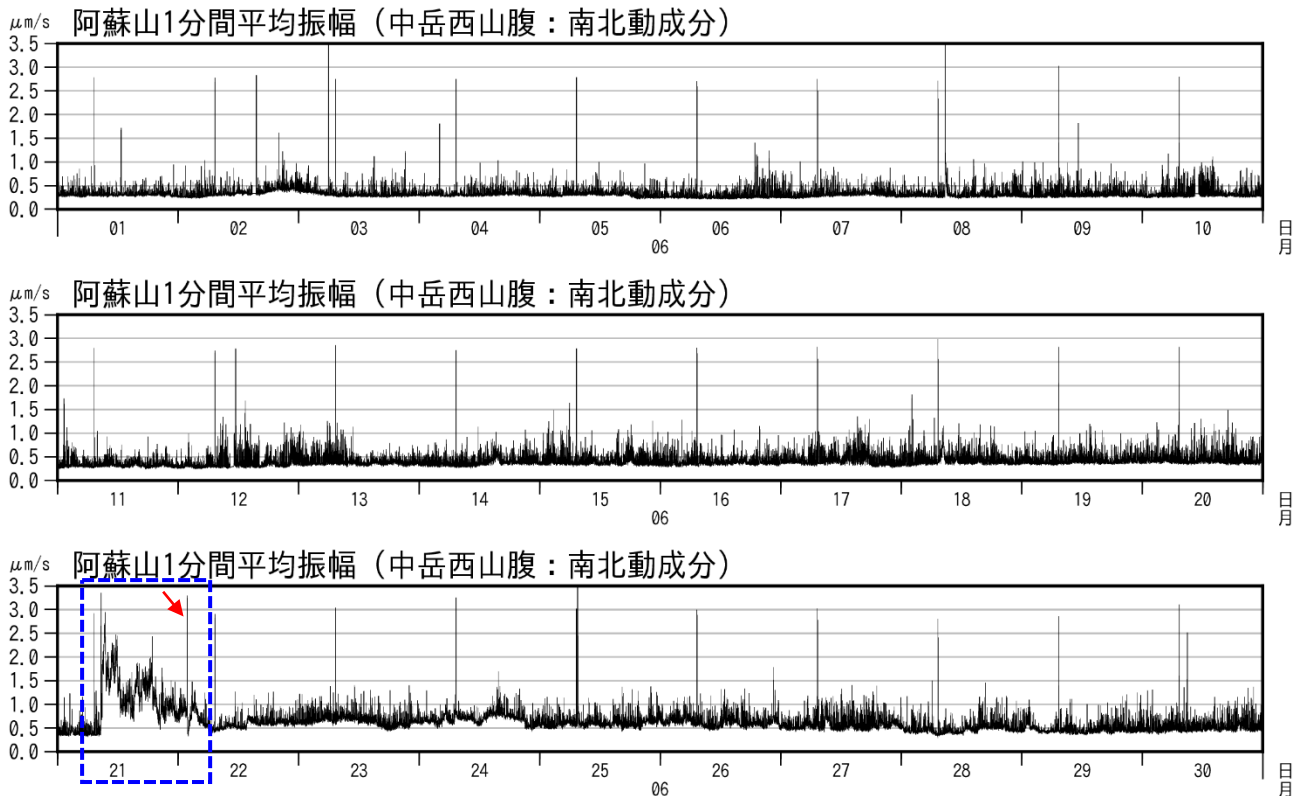


図1 阿蘇山 火山性微動1分間平均振幅（中岳西山腹観測点南北動成分 2026年6月1日～30日）

- ・火山性微動の振幅は小さな状態で推移していましたが、21日09時頃から振幅が増大し、やや大きな状態となりました（青破線内）。
- ・22日01時50分頃には中岳西山腹観測点南北動成分の1分間平均振幅が3.0μm/s程度と一時的に大きな状態となりましたが（赤矢印）、その後は概ね1.0μm/sを下回る程度の小さな状態で経過しました。

1分間平均振幅で毎日07時20分頃にみられる振幅の高まりは校正信号によるものです。

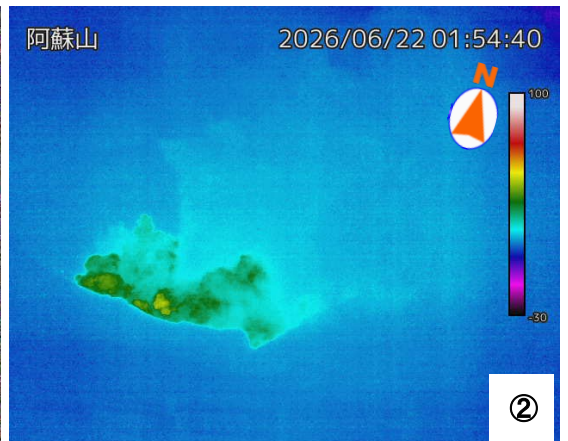
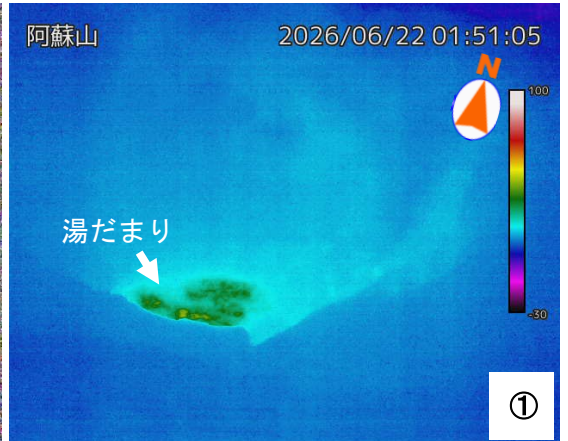
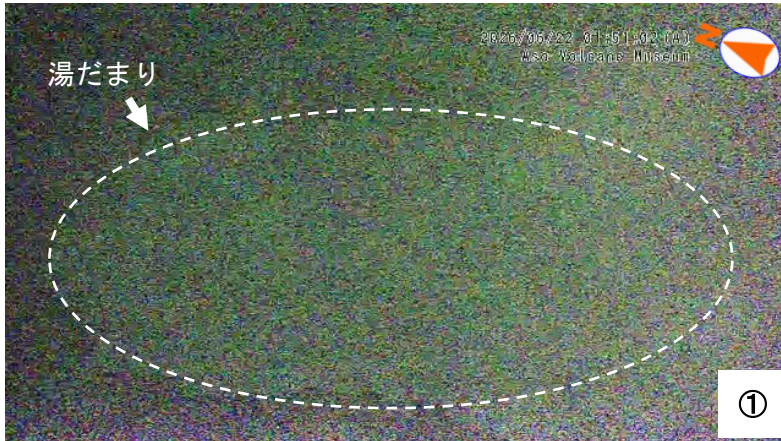
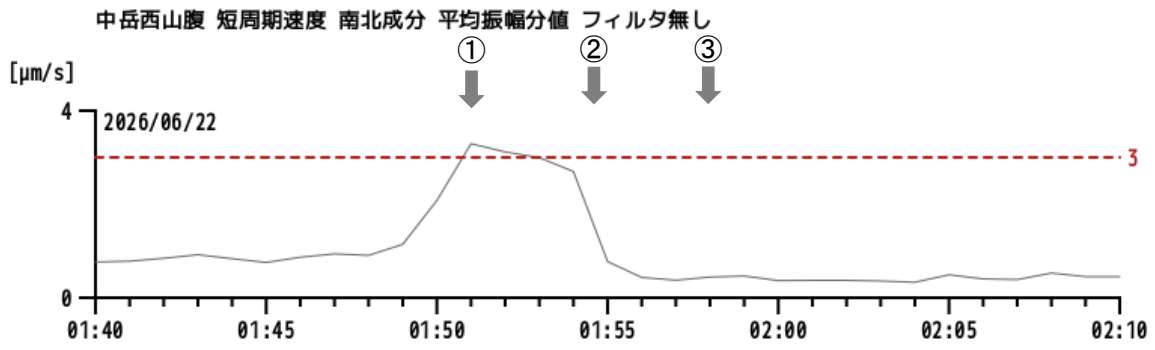


図 2-1 （前ページ）阿蘇山 火山性微動 1 分間平均振幅と中岳第一火口の火口内や噴煙の状況
（最上段：中岳西山腹観測点南北動成分 6月22日01時40分～02時10分
中上段・中下段：6月22日01時51分、01時54分
（左）阿蘇火山博物館の提供による火口カメラA
（右）第二火口南縁監視カメラ
最下段：6月22日01時58分 草千里監視カメラ）

- ・監視カメラで22日01時50分頃の火山性微動の振幅増大後に、噴出物が火口内にとどまる程度の土砂噴出を確認しました（②）。
- ・土砂噴出に伴い、白色の噴煙が火口縁上600mまで上がりました（③）。

最上段の丸数字（①②③）はそれぞれ中上段、中下段や最下段に示す数字に対応します。



図 2-2 阿蘇山 中岳第一火口南側火口壁の赤熱の状況
（6月29日 阿蘇火山博物館の提供による火口カメラA）

22日以降の夜間に時々、南側火口壁の赤熱（黄破線部）を確認しました。監視カメラにより南側火口壁で赤熱が観測されたのは2024年7月12日以来です。

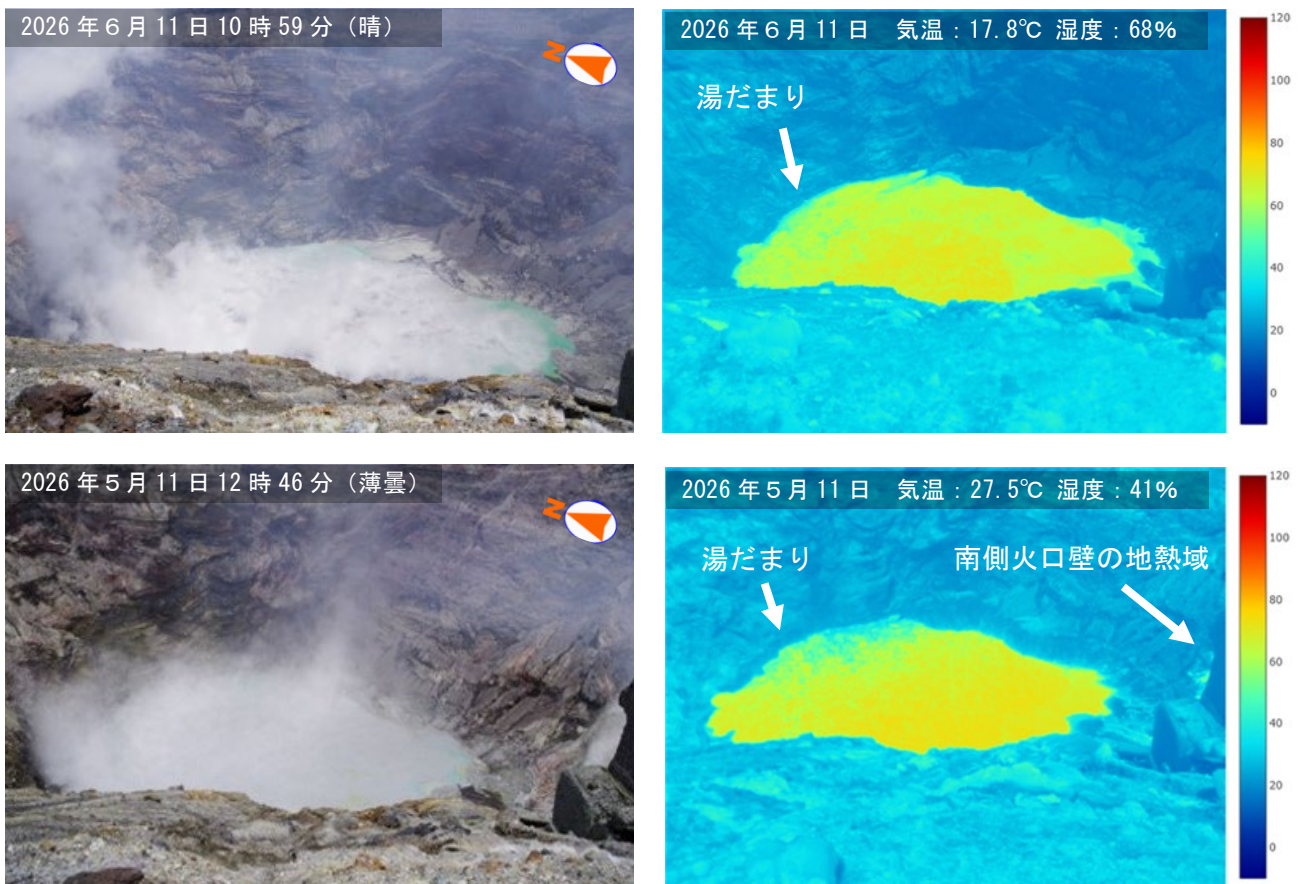


図3-1 阿蘇山 中岳第一火口底の状況

（火口南西側観測定点から撮影 上図：6月11日、下図：5月11日）

- ・11日に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約7割と前月（5月：約6割）と比べて増加していました。
- ・噴湯や土砂噴出は認められませんでした。
- ・赤外熱映像装置による観測では、湯だまり面の最高温度は74℃と前月（5月：69～76℃）と同程度でした。

※赤外熱映像装置で撮影した画像は、6月11日は11時01分～06分、5月11日は12時54分～59分の複数の画像を合成し噴煙の影響を軽減しました。

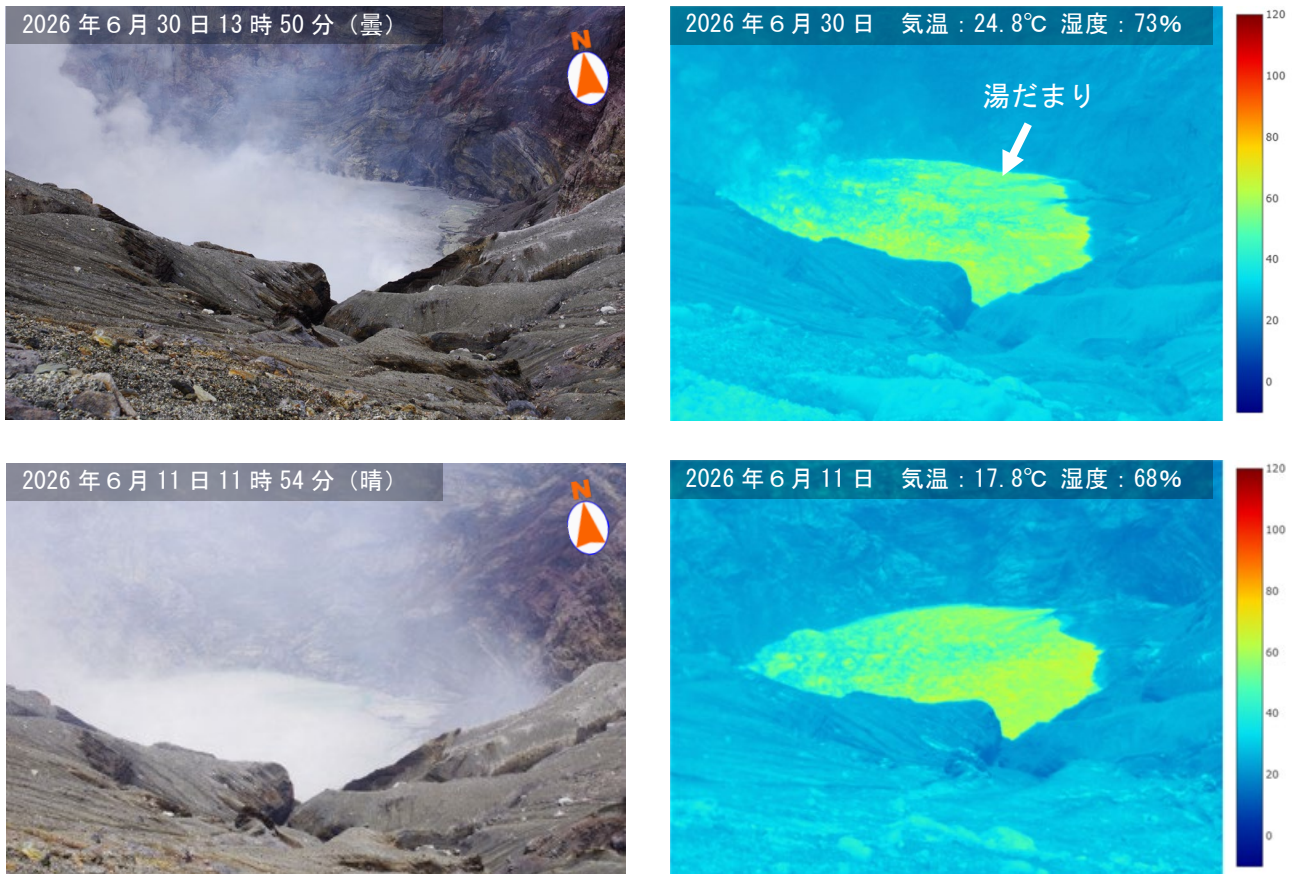


図 3-2 阿蘇山 中岳第一火口底の状況

（火口南側観測地点から撮影 上図：6月30日、下図：6月11日）

- ・ 30日に実施した現地調査では、火山性微動の振幅増大前の観測（11日）に比べて中岳第一火口内の湯だまりの色や量に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 噴湯や土砂噴出は認められませんでした。

※赤外熱映像装置で撮影した画像は、6月30日は13時54分～59分、6月11日は11時45分～50分の複数の画像を合成し噴煙の影響を軽減しました。

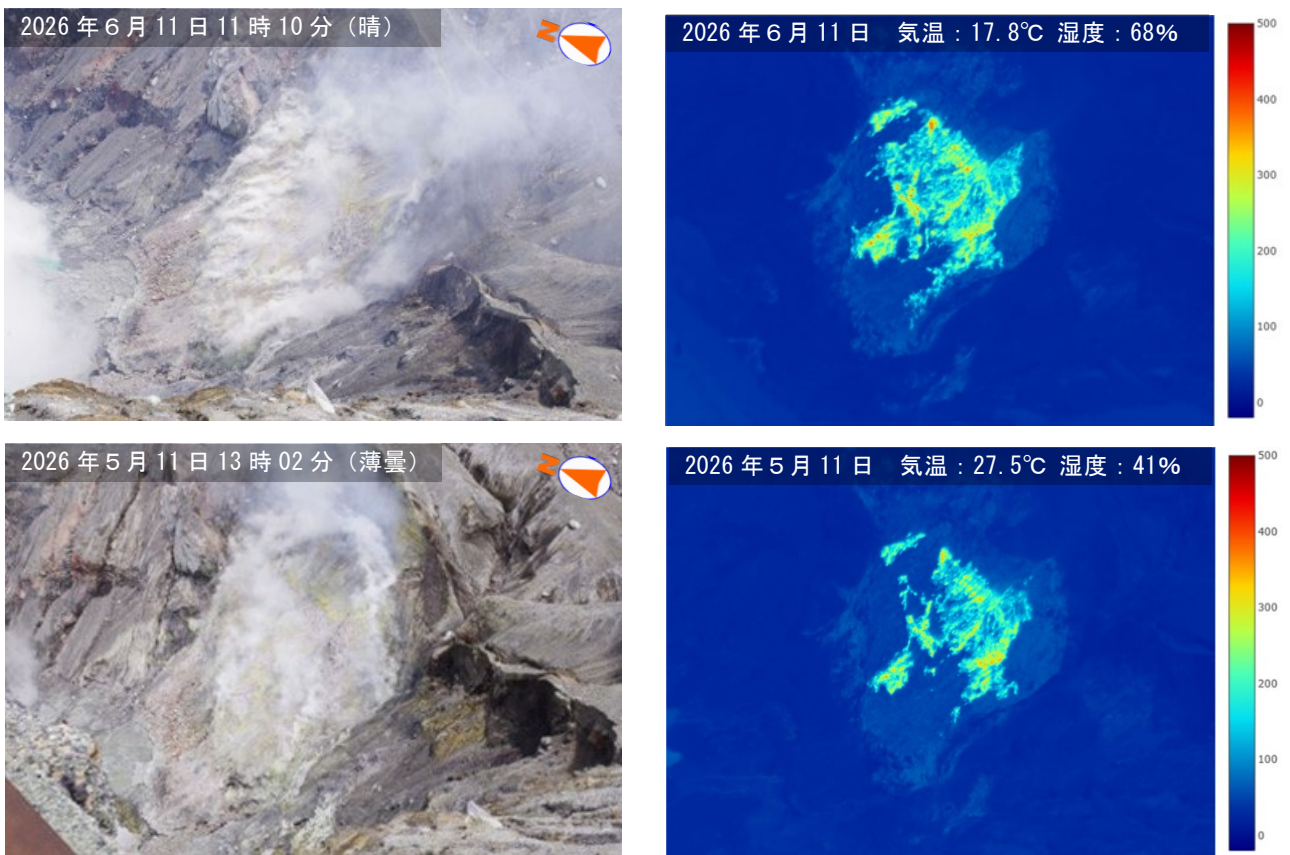


図 3-3 阿蘇山 中岳第一火口 南側火口壁の状況
 （火口南西側観測定点から撮影 上図：6月11日、下図：5月11日）

11日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測で、南側火口壁の最高温度は403°Cと前月（5月：345～371°C）と比べて高くなっており、高温の領域は拡大していました。

※赤外熱映像装置で撮影した画像は、6月11日は11時26分～31分、5月11日は13時21分～26分の複数の画像を合成し噴煙の影響を軽減しました。



図 3-4 阿蘇山 現地調査観測位置図（観測位置及び撮影方向）

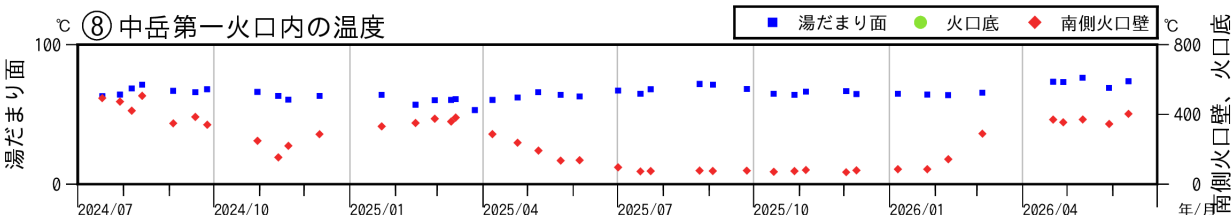
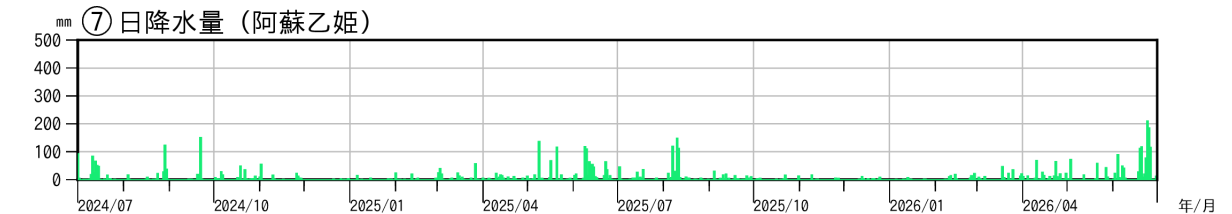
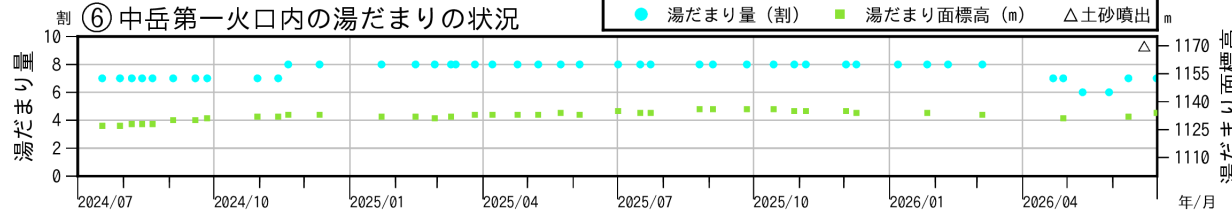
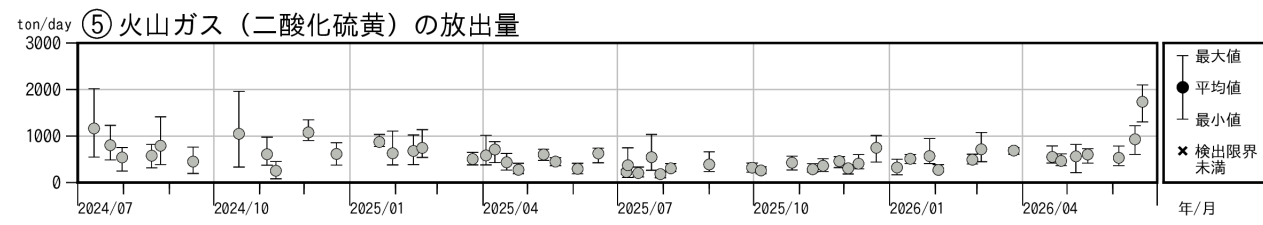
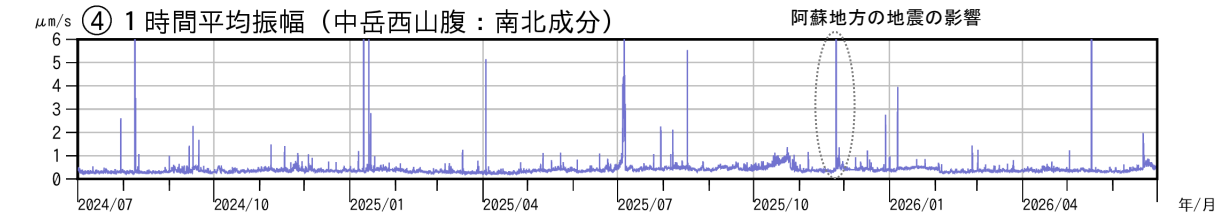
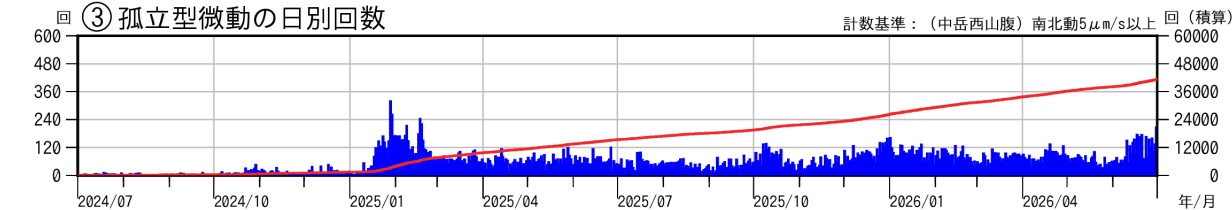
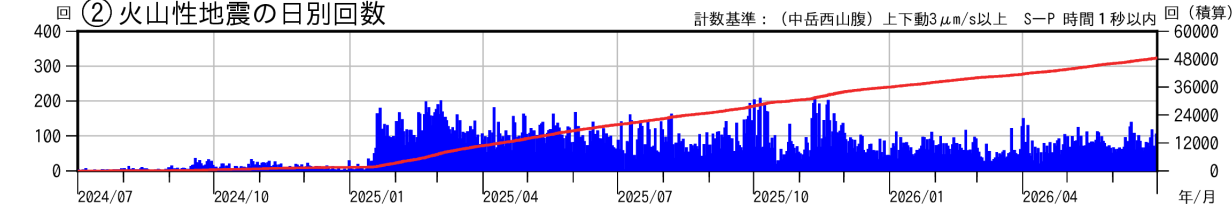
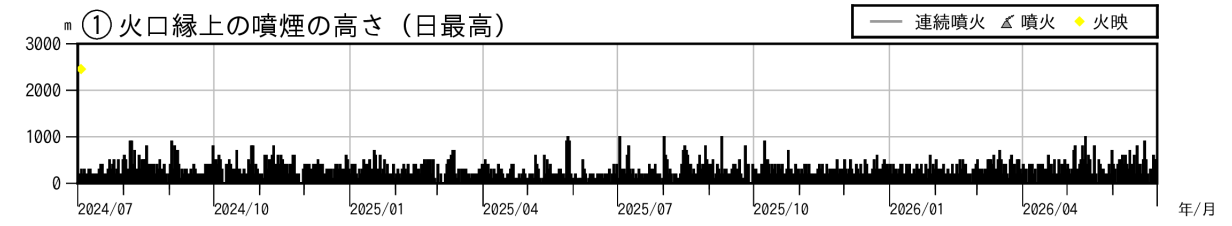


図4 （前ページ）阿蘇山 火山活動経過図（2024年7月～2026年6月）

< 6月の状況：21日に噴火警戒レベルを1から2に引き上げました。>

- ・中岳第一火口では、白色の噴煙が最高で火口縁上900m（5月：1,000m）まで上がりました。
- ・火山性地震の月回数は2,366回（5月：2,536回）と、やや多い状態でした。孤立型微動は3,266回と前月（5月：1,919回）と比べて増加し、やや多い状態でした。2025年1月中旬頃から火山性地震と孤立型微動が増加した状態が続いています。
- ・火山性微動の振幅は小さな状態で推移していましたが、21日09時頃から振幅が増大し、やや大きな状態となりました。22日02時頃からは概ね1.0 μ m/sを下回る程度の小さな状態で経過しました。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、火山性微動の振幅増大前に1日あたり500～900トン（5月：600トン）と少ない状態で経過していましたが、21日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した現地調査では、1日あたり1,700トンと増加し、やや多い状態でした。
- ・6月に実施した現地調査では、中岳第一火口内に概ね灰白色の湯だまりを確認しました。湯だまり量は約7割と前月（5月：約6割）と比べて増加していました。湯だまり面の最高温度は74 $^{\circ}$ Cと前月（5月：69～76 $^{\circ}$ C）と同程度でした。
- ・南側火口壁の最高温度は403 $^{\circ}$ Cと、前月（5月：345～371 $^{\circ}$ C）と比べて高くなっていました。

赤線は火山性地震や孤立型微動の回数の積算（右軸）を示します。

⑤、⑥及び⑧は現地調査の結果を示しています。

⑥の湯だまり量及び湯だまり面標高は、火口縁からの観測で確認しています。

⑦はアメダス阿蘇乙姫（中岳第一火口から北西約8km）の観測値です。

⑧は赤外熱映像装置で計測しています。火口底温度は湯だまり表面と南側火口壁を除く火口内の温度を示します。

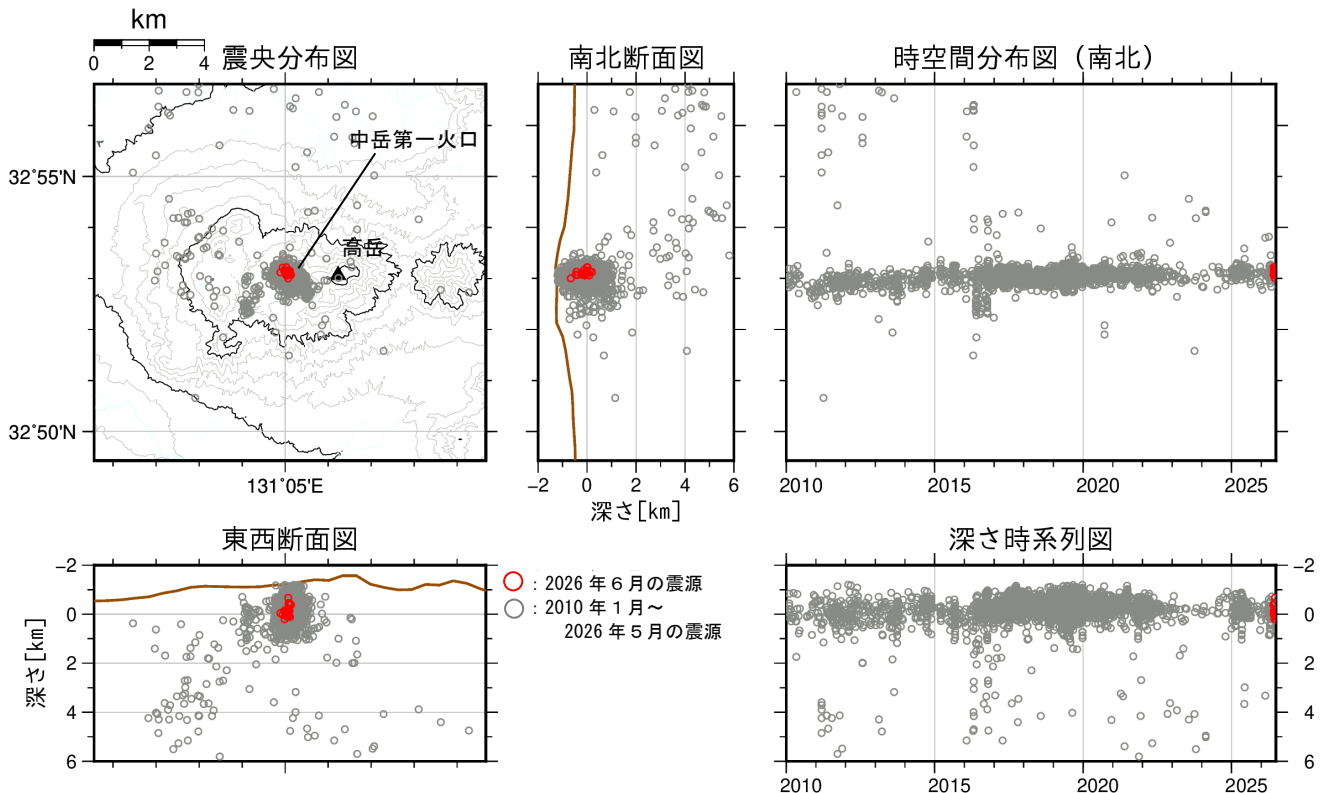


図5 阿蘇山 火山性地震の震源分布

< 6月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、中岳火口付近のごく浅いところから深さ0km付近に分布しました。

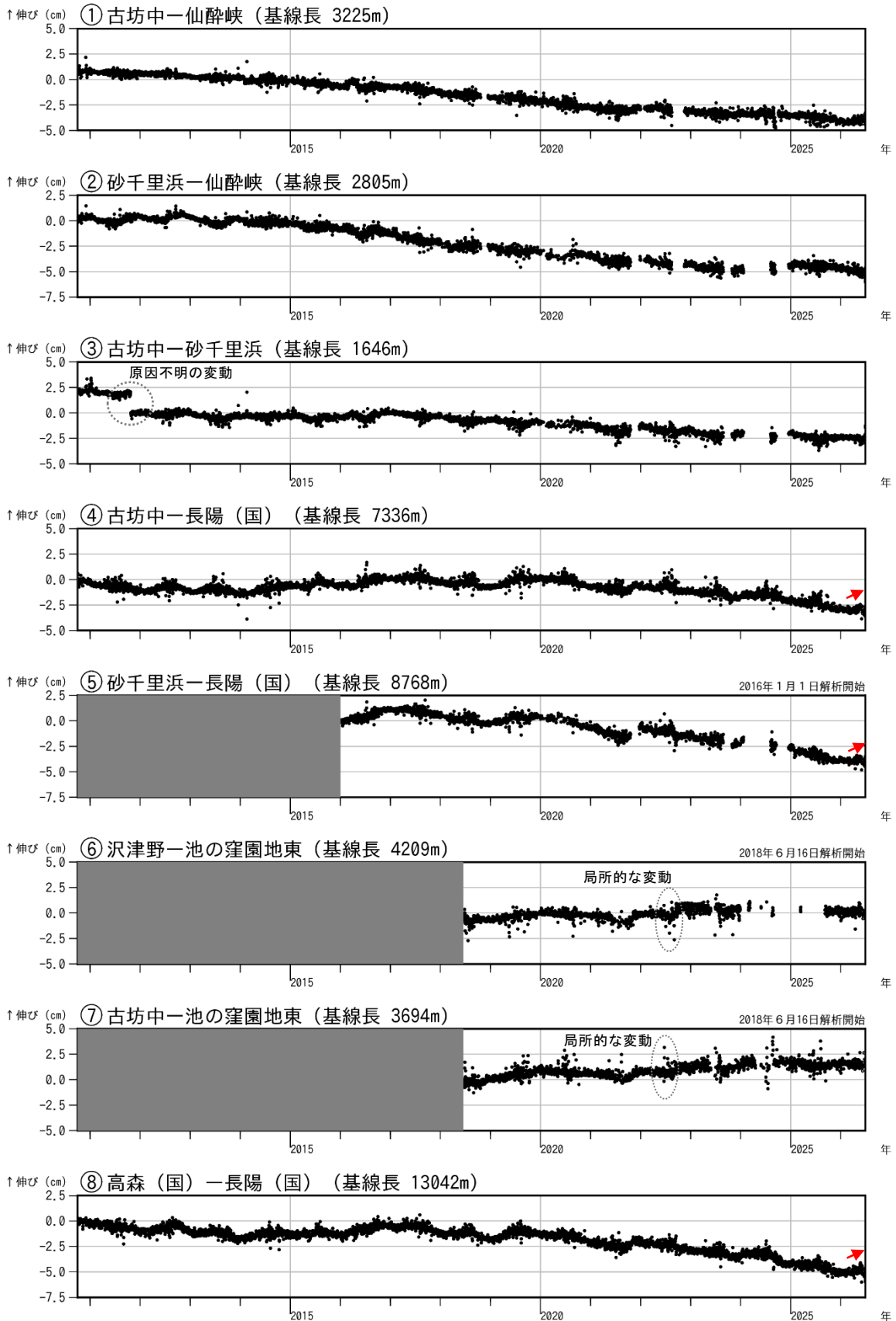


図6 阿蘇山 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月～2026年6月）

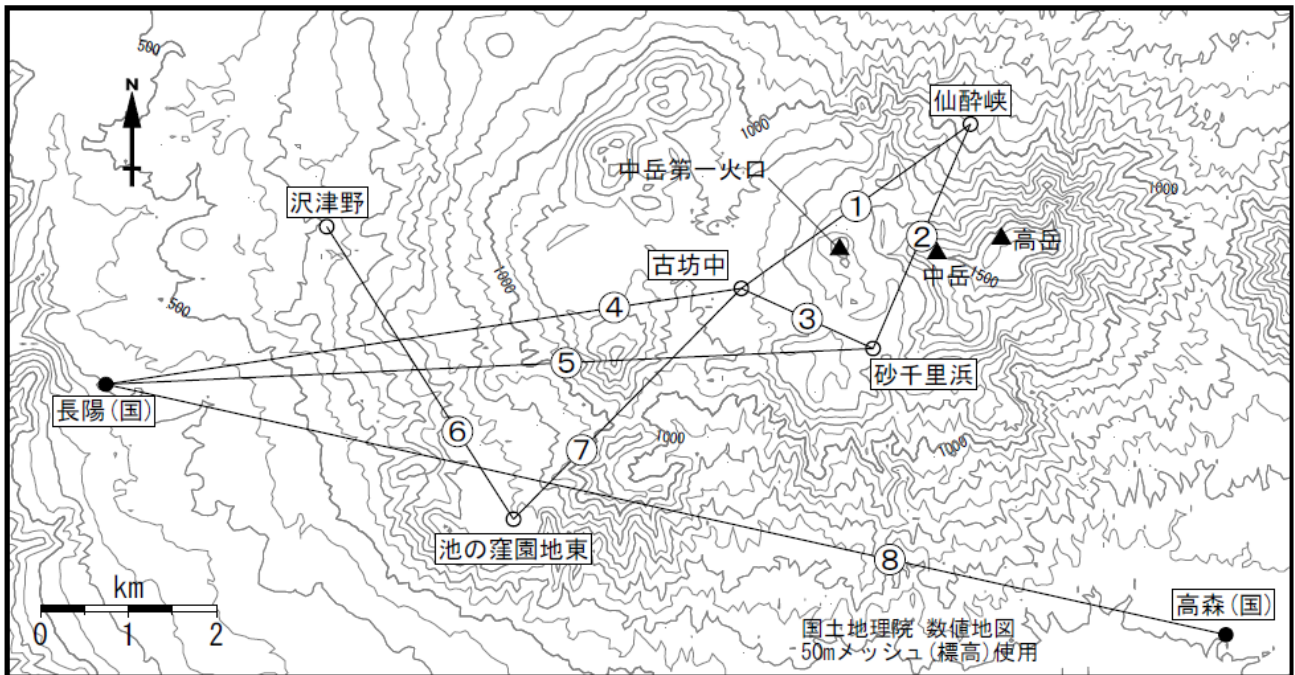
GNSS 連続観測では、2026年5月頃から草千里を挟む基線（④、⑤）及び広域の基線（⑧）において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

これらの基線は図7の①～⑧に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年4月16日以降の基線長は、平成28年（2016年）熊本地震の影響による変動が大きかったため、この地震に伴うステップを補正しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

（国）：国土地理院



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院

図7 阿蘇山 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院

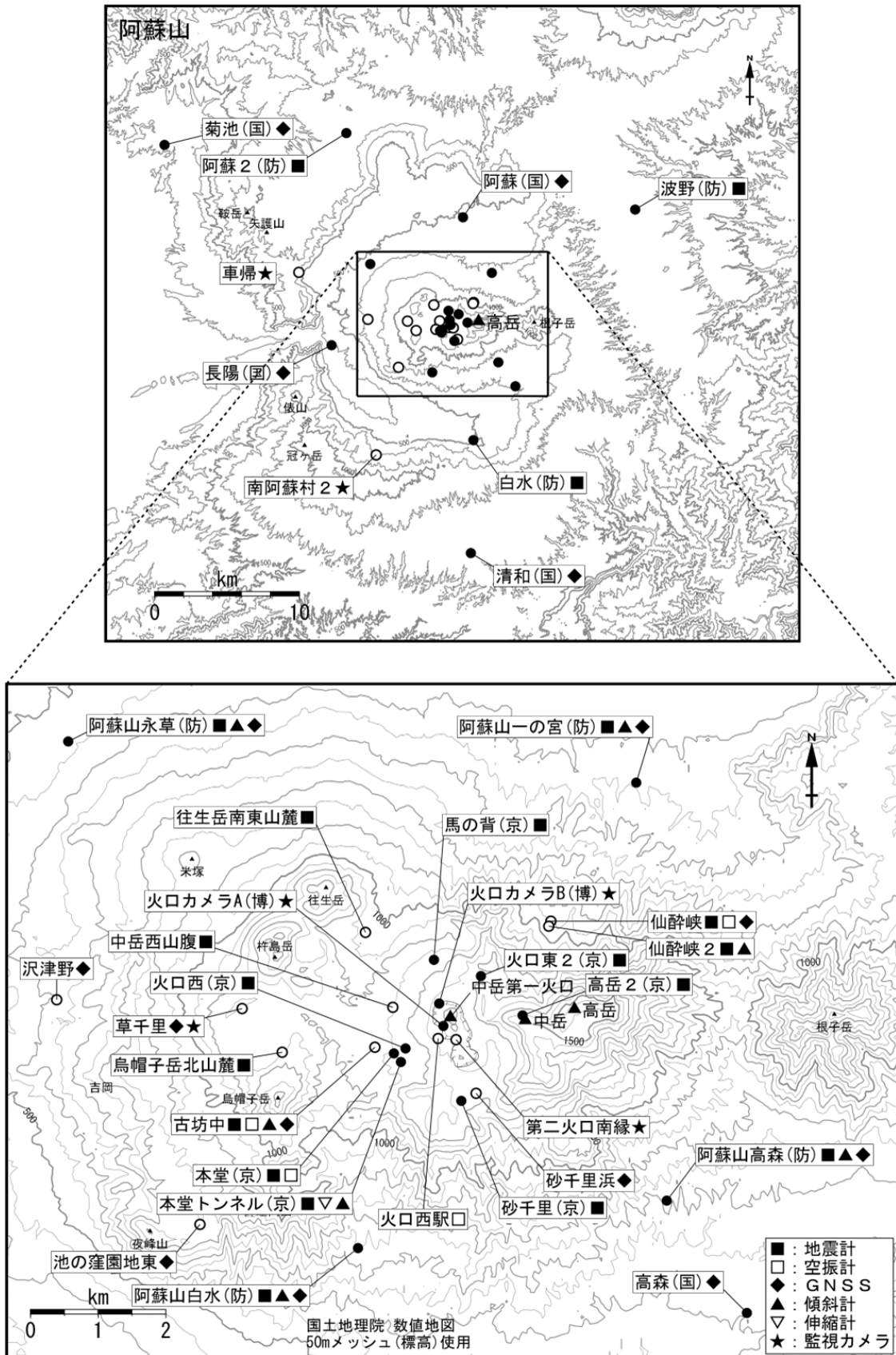


図8 阿蘇山 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所、(博)：阿蘇火山博物館、(国)：国土地理院